

好收我骨瘴江邊　好し我が骨を收めよ瘴江の邊ぼろ

唐の皇帝、憲宗（在位八〇六～八二〇）は仏教を厚く信じ、インドからお釈迦様の骨、仏舍利を宮中に迎え供養しようとした。韓愈は儒学の立場から反対し、「仏骨を論ずる表」を奉りました。主旨は、中国には立派な聖賢の教えである儒教があるのに他国の異教を尊重するのはよろしくないということ。これを見た憲宗の怒りに触れ、死罪になるところ罪一等を減ぜられ、潮州（広東省潮安県）の刺史に左遷されました。長安から八千里（約1300キロメートル）もあります。いかに遠いことか。また南方は南蛮と呼ばれたほどの辺鄙な所です。「もう長安には生きて帰れるとは思わなかった」のではないのでしょうか。時に韓愈は年五十二歳でした。

悠久の名作シリーズ(12)

『示姪孫湘』　韓　愈

左遷されても気概を持った硬骨漢

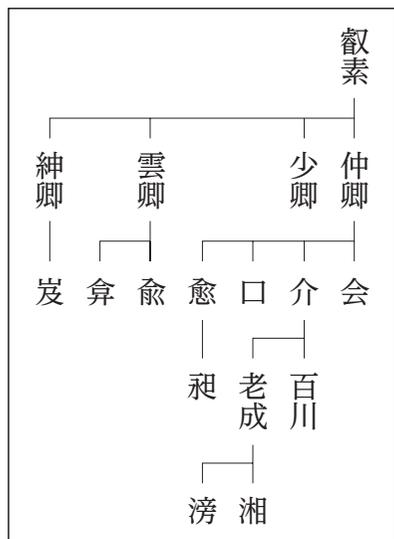
姪孫湘に示す　韓　愈

一封朝奏九重天　一封朝に奏す九重の天
夕貶潮州路八千　夕べに潮州に貶せらる路八千
欲爲聖明除弊事　聖明の爲に弊事を除かんと欲す
肯將衰朽惜殘年　肯て衰朽を將つて殘年を惜しまんや
雲橫秦嶺家何在　雲は秦嶺に横わり家何くにか在る
雪擁監關馬不前　雪は監關を擁して馬前まず
知汝遠來應有意　知る汝が遠く來る應に意有るべし

韓愈の系図

韓愈、韓は性、愈は名で、字は退之。唐の第八代皇帝、代宗の大歴三年（七六八）秘書部、韓仲卿の四男として生まれました。同五年、父が亡くなり、三歳の愈は以後長兄の韓会に養われます。彼は優れた文学者で学識もあり宮中で重んじられました。同十二年、宰相元載が失脚すると、会も左遷されて南方の韶州（広東省曲江県）の西の地の刺史となりました。夫婦に子供は無く、弟の介の子、老

成を養子にして
 いました。愈も
 会の一家に従っ
 て韶州に行きま
 した。建中二年
 (七八一) 会は
 その地で亡くな
 りました。年は
 四十二歳。愈は



十四歳で老成は四歳でした。その後兄嫁に兄弟のように
 育てられ、甥の老成は愈より先に亡くなりました。その
 残された子が湘です。

故事成語「推敲」推すと敲くのエピソード

賈島(七七九―八四三)という詩人がまだ僧侶の時左記
 に掲げた詩を作りました。

題李凝幽居 李凝の幽居に題す

閑居少鄰並 閑居鄰並少なく

草徑人荒園 草徑荒園に入る

鳥宿池邊樹 鳥は宿る池邊の樹

僧敲月下門 僧は敲く月下の門

過橋分野色 橋を過ぎて野色分かれ

移石動雲根 石を移して雲根動く
 暫去還來此 暫く去って還た此に來たる
 幽期不負言 幽期不言に負かず

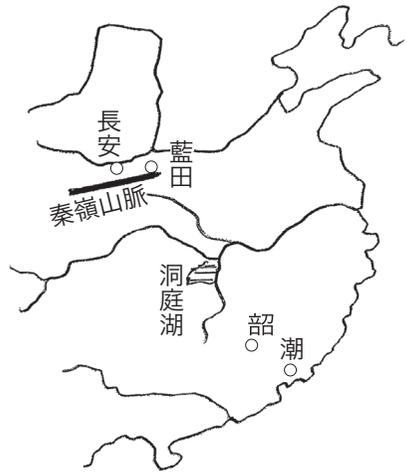
この詩の四句目の詩語が問題のところでは

「僧は推す月下の門」にするか「僧は敲く月下の門」に
 するか賈島は悩みながら馬を進めていると、当時都の長官
 をしていた韓愈の行列にぶつかりました。わけを聞いた韓
 愈は「敲く」が良いと判断した。月下の静寂さの中でスー
 と戸を「推す」よりもトントンと「敲く」音の響きが静寂
 さをより際立たせる効果があるからです。これが機縁に
 なって賈島は還俗し、韓愈の門下となり、進士の試験にも
 合格しました。因みに「推敲」は文章をよく練る意味に使
 われています。

解釈とその後の作者

韓愈の左遷は名目上転任とはいえ罪人としての追放であ
 り、家族も長安に留まることは許されなかった。都を離れ
 て約三十キロ南方の藍関まで来たとき、後を追ってきた青
 年がいました。韓老成の子、湘でした。その時の思いを綴っ
 たこの詩が正式題名「左遷至藍関示姪孫湘(左遷せられて
 藍関に至り姪孫湘に示す)」であります。

「仏骨を論ずる表」を封にして朝、九重に奏上した。と



もったからである。たとえ死罪になろうとも、どうして老いさらばえた身をもって残りの年月を惜しもうか、いや思わない。

秦嶺山脈には雪が横たわって我が家はどの辺りにあるか分からない。藍田の関所には雪がいっぱい積もって馬が動けないほどである。

おまえが遠くここまで追って来たのはきつと何か訳があるのだらう、願うことは私の骨をあ毒ガスの立ちこめる川のとりで拾っておくれ。

瘴江には文字通り毒気による風土病があり、北の人間が南方に行くと、その病気にかかって死んでしまう。自分も潮州に行けば生きて帰られない。だからおまえは最後の名残りを惜しみに来てくれたのだ。

その年の十一月、愈は潮州の刺史から袁州の刺史に転じ

ころがもう夕方にはかの遠い八千里もある潮州に左遷されることになった。

私がこの表を奉つたのは、聖明な天子のために「仏骨を祀る」という曲がったことを除こうとお

ました。翌元和十五年（八二〇）正月、憲宗はにわか崩じられ、第三子、穆宗ぼくそうが即位しました。九月には愈は国子祭酒（国立大学総長）として長安に呼び戻されました。皇帝の崩御が愈に幸いし、しかも流謫りゅうたくの原因となった上奏は、のちのち「皇帝に逆らって仏骨を焼き捨てる」といったカミナリオヤジ」と言われましたが、その「硬骨漢」ぶりが愈の地位を築くのに大いに役立ちました。穆宗即位の翌年は長慶と改元され、七月には愈は兵部侍郎（防衛省次官）に転出しました。五十四歳でした。翌二年九月に吏部侍郎（人事院副総裁）に転じ、三年六月、京兆尹兼御史大夫（検事総長）となり、十月に吏部侍郎に復しました。長慶四年に没し、年五十六歳でした。